# 聖戦の普遍性と歴史性

## —John Milton の *Paradise Lost* における天上の戦いについて—

吉　中　孝　志

英国の１６世紀末から１７世紀初期にかけて顕著な主題として扱われ、聖職者たちの役割の一つでもあったのは、霊的な戦いを軍事的な戦いとして描く比喩を転倒させて、軍事的戦いを霊的な戦いとして正当化する比喩を説教壇で駆使することであった。[1] そして、清教徒革命の戦場で、クロムウェル (Oliver Cromwell) や新型軍 (the New Model Army) は、正に「神の摂理」を叫びながら敵陣に突進したのである。神学的には、アウグスティヌスが『神の国』において「人を殺してはならない」という誡命の例外として「神の命令によって戦争」することを是認している (第１巻第２１章) し、[2] 何よりも彼らは、当時、加速度的に強まり続けていた終末思想の後押しを受けて、ヨハネの黙示録に記された「獣」とその軍勢が「小羊に戦いをいどんでくるが、小羊は、主の主、王の王であるから、彼らにうち勝つ。また、小羊と共にいる、召された、選ばれた、忠実な者たちも、勝利を得る」(第１７章第１４節) ことを固く信じて戦ったのである。クロムウェル自身、キリスト教的終末思想が最も政治的な形で現実化したと言えるであろうベアボーンズ議会で「我々は、小羊と共に、小羊の敵に対して戦う者たちが誰であるか知っている。彼らは、召された、選ばれた、忠実な者たちである。」と演説している。[3] ミルトン自身も *Christian Doctrine* の中で、旧約聖書の神の律法に従えば、戦争は許されるものであると考えており、彼の『失楽園』第６巻の３日間にわたる天上の戦いの描写もまた、この聖戦の論理に基づいた、いわば勧善懲悪の物語として読まれるべき側面を持っていることは否めない。しかしながら、ミルトンは幾つかの点で、また或る条件下で、聖戦の正当性に懐疑的な身振りを示しているように私には思われる。語り手の天使ラファエルが、「霊的なものを物的な形相に擬えて」、「地上の事柄を物差しにして」天上の戦いを語るが故に、[4] 読者は、ミルトン自身の現実の戦争観とミルトンの生きた時代を聖書の神話に重ねざるをえず、結果としてミルトンは、「聖戦」の論理が十全に機能すべき観念的「天上の戦い」の描写において、現実的な「地上の戦い」における「聖戦」論理の機能不全を示唆するに至ったのだと考えられる。

このことは、換言すれば、天での出来事と地での出来事を峻別して語ることも読むことも、少なくとも堕落後の人類には、できないということである。つまり、たとえ「天の無敵の王」('heaven's matchless king', Book 4, line 41) に反旗を翻すことと地上の君主に対

して反乱を起こすこととは区別すべきで、前者は悪であるが、後者は、ミルトンが他の箇所で論じているように、[5] 善でありうる、としても、既存の秩序を崩壊させるという点において、そしてそれが武力によってなされるという点において、サタンとその軍勢の行為は、例えばミルトンが決して明示的にクロムウェルを批判した証拠はないという意味では、論理的思考と矛盾を来たすとしても、少なくとも読書体験としては、クロムウェル率いる清教徒の軍勢と重ならざるをえないのである。ラファエルが言うように「この地上は天上の影にすぎず、この二つの世界に存在するものが、地上で考えられているよりも遥かに相互に似ている」('what if earth / Be but the shadow of heaven, and things therein / Each to other like, more than earth is thought', Book 5, lines 574-576) のならば、天上の戦いは、地上の戦いと否が応でも相互に似ていると考えられるし、もしもミルトンが、地上での戦いというものに少なからぬ嫌悪感を抱いていたならば、その反戦意識が天上の戦いの描写に反映されたとしても不思議はないであろう。

James Freeman などの一連の批評家たちが、王政復古後のミルトンについて、政治的暴力と戦争に対する彼の失望感を指摘している。[6] 内省へ向かった彼の精神が、無政治的な静寂主義や平和主義の境地にまで達したとは私は考えていないが、その批判として提出された、Robert Fallon らの、１７世紀清教徒の教義に合致する戦闘的ミルトン像や最近では John Coffey らの、暴力は本来贖罪的で再新への契機となることを信じ、さらなる革命的動乱を待ち望んでいるミルトン像に、[7] 時には敢えて時代錯誤的な考察を加えながら修正を試みたい。 ミルトンの天上の戦いの描写自体が彼の生きた時代を重ねる一種の時代錯誤的な語りで出来上がっているからだけでなく、「詩作品の主たる社会的価値の一つ」が、Jerome McGann が述べたように、「一方で、普遍性の高いレヴェルで、他方において個別性の、同じように高いレヴェルで機能する概念形式であるということである」ならば、[8] ミルトンの詩もまた、１７世紀清教徒の聖戦の論理と同時に、現代と共通する戦争への嫌悪感を十分宿し得ると考えられるからである。しかし逆に、彼の生きた時代の中に『失楽園』を措いて見た場合も、私には、自らの信仰が必ずしも普遍の真理ではなく、一つの言説にすぎない、という意識が強く醸成されていた１７世紀の後半に、自分たちの戦いや勝利のみが聖なるものだとミルトンが信じきれたとは考えにくいのである。[9]

『失楽園』の中でのミルトンの戦争と争いに対する否定的な態度は、戦争と戦闘を賛美するホメロスやヴェルギリウス等の古典叙事詩を弾劾しながら、次のようにミルトンが言う時に窺える。[10]

Not sedulous by nature to indite
Wars, hitherto the only argument
Heroic deemed, chief mastery to dissect
With long and tedious havoc fabled knights

In battles feigned; the better fortitude
Of patience and heroic martyrdom
Unsung (Book 9, lines 27-33)

（今まで唯一の英雄的な主題とみなされてきたのは戦いであったが、私は戦いを題材にして描くのに、生まれつき余り熱意がもてない性分なのだ。戦いを扱うのに必要な技量は、主として虚構の戦場において、空想上の騎士たちがいかに長々とくどいほど残虐な殺戮を行うかを描く点にあり、そんなことより忍耐というさらに立派な不屈の勇気や、英雄的な殉教の死などは、全く歌われなかった。）

また、ミルトンは、天使ミカエルに人類の堕落後の特質の一つについて次のように語らせる。

in those days might only shall be admired,
And valour and heroic virtue called;
To overcome in battle, and subdue
Nations, and bring home spoils with infinite
Manslaughter, shall be held the highest pitch
Of human glory, and for glory done
Of triumph, to be styled great conquerors,
Patrons of mankind, gods, and sons of gods,
Destroyers rightlier called and plagues of men.
(Book 11, lines 689-697)

（当時は力だけが賞賛され、力だけが勇気とか英雄的資質とか呼ばれていた。戦いに勝ち、諸国民を征服し、殺戮に殺戮を重ねて無数の人命を損なって戦利品を故国に持ち帰ることが、何よりも人間としての最高の栄誉とされた。そして、このような栄誉のゆえに、赫々たる勝利に輝く偉大な征服者だとか、人類の守護者だとか、神々だとか、神々の子らだとか、呼ばれるというわけだ。しかし、本当は人類の破壊者、人類の疫病神と呼ばれてこそしかるべき連中なのだ。）

この反戦論的ミルトンという視点から第6巻の天上の戦いを読み直すとサタン—彼の生んだ悪鬼「死」さえもが、「未だかつて誰も破ったことのない天国の平和と信義を破った」「あの反逆天使」('that traitor angel' 'Who first broke peace in heav'n and faith, til then / Unbroken', Book 2, lines 689-91）と呼んだ悪玉—そして彼の部下たちだけでなく、神と

キリストに付き従う、アブデル等の善玉天使たちの描写にも幾つかの点でミルトンの「戦い」というものへの、さらには「聖戦」というものへの信念の危うさがちらと見えるように思われる。

ミルトンは、*The Tenure of Kings and Magistrates* において、政府の起源について新教改革派の標準的説明をしている。堕落後、人類は「平和と公的権利に違反するものを力と罰によって制限するように特定の権威を定める必要がある」と言うのである。[11] 堕落後の世界に存在する暴力（'violence'）故に正しい者による力（'force'）の行使が必要なものとなる、というこの考え方こそが『失楽園』の中で確認されているようにも思える。特に第6巻において、堕天使たちの非合法の暴力は、神と神の軍勢の合法的な力と対照的に描かれているように見えるからである。合法的な力の行使は暴力ではないという主張は、神の側に付く天使たちが、比喩的ではない武具を纏っていることにも表されていると言えるだろう。彼らはサタンの反乱が起こる前から常備軍として、平和を維持する役目を果たしているのである。しかし、ミルトンの武具を纏った天使たちに先行する例としては、ほとんどの場合、悪い天使たちは平服で描かれる一方で、良い天使たちが武装している例が一般的であることや、[12] さらには良い天使たちの武具が、「信仰の盾」といったような比喩的な、霊の武具であることが多いことを考えると、『失楽園』でのミルトンの独自性は、善悪両方の天使に同じ、物質的な武具を纏わさせていること、換言すれば、良い天使にも悪い天使と同じ、この世的な武器を担わせているということにあると言えるだろう。天上の戦いを単なる神話や寓意として理解させるのではなく、物語の効果としてのリアリズムを助長しながら、地上の戦いを重ね合わさせているのである。そして、ここで最も重要なのは、良き天使たちの武器が、義に適った聖戦の結果に見合うべく明らかな勝利をもたらさないことである。アブデルは次のように言う。

> ... nor is it aught but just,
> That he who in debate of truth hath won,
> Should win in arms, in both disputes alike
> Victor (Book 6, lines 121-124)

（真理の問題の論戦において勝った者が、武力においても勝つ、つまり二つの戦いにおいて等しく勝利者になるということは、当然なことだといわざるをえない。）

確かにこの主張は、*Eikonoklastes* (1649) において真理と正義の剣との関係に関して述べられている件にも見られ、[13] 『失楽園』においても天上の戦い3日目のキリストの勝利で再度、確証されているかのようにみえる。しかし、アブデルの最初の一撃は、サタンを即座に屈服させはしないし、ミカエルとサタンがあいまみえた際も彼らは「ただの一撃で一

挙にことを決し、・・・二度と繰り返すつもりは毛頭ない様子であった」('one stroke they aimed / That might determine, and not need repeat', Book 6, lines 317-318) にもかかわらず、決定的な勝敗をもたらすことはない。彼らの力は「全能者に次ぐ」('next to almighty', Book 6, line 316) ものであっても、結局のところ全能者のそれではないからだ。 さらに、正義の天使たちは2日目のサタン側の攻撃によって壊滅状態に陥り、正義は、必ず勝つという公式を成り立たせていないのも事実だし、3日目のサタンたちの地獄への転落は、少なくとも『失楽園』の中での最終的なキリストの勝利を意味していない。正義の天使たちの敗退が描かれる時、彼らにとっての武具はむしろ脱ぎ捨てなければならないものとして表されている。

... down they fell
By thousands, angel on archangel rolled;
The sooner for their arms, unarmed they might
Have easily as spirits evaded swift
By quick contraction or remove; but now
Foul dissipation followed and forced rout

(Book 6, lines 593-598)

(ただもう幾千、幾万となく倒れ伏すのみで、大天使の上にさらに天使が覆いかぶさって転倒するといった有様であった。武具を着けていたためなおさらひどく、これが何も着けていなかったならば、霊質をもった天使らしく、素早く体を収縮させるなり位置を変えるなりして、攻撃を避けえたかもしれなかった。 しかし、今や惨めな潰滅と敗走は不可避であった。)

武具そのものが彼らの害になるという事態は、悪しき天使たちにとっての状況と全く同じ('Their armour helped their harm, crushed in and bruised / Into their substance pent, which wrought them pain / Implacable, and many a dolorous groan', Book 6, lines 656-658) であって、サタンたちの攻撃に応じるために良き天使たちは、自分たちの武器を放棄しなければならない ('Their arms away they threw', Book 6, line 639)。 しかし、一見、攻勢に転じたかのように見える正義の天使たちの攻撃は、語り手ラファエルによる括弧内の神への賛辞、「(神がその強力な天使たちに与えたもうた卓抜な能力と膂力とを知るがよい!)」(['behold the excellence, the power / Which God hath in his mighty angels placed'], Book 6, lines 637-638)が、まるで聖戦に対する皮肉であると言ってもよいかのように、皮肉な結果を招来することになる。そもそも、サタンの発明した火薬と大砲は、マンモン曰く「天国を地獄さながらにする」神のいかずち ('deep thunders roar / ...

and heaven resembles hell', Book 2, lines 267-268）を真似て作られたような武器であった。そしてその殺傷能力をさらに上まわるために良き天使たちが最終兵器として使ったのは、大地から引きちぎられた山々であった。ついにはサタンの軍勢もまた同じ兵器を使い始め、天国が、空中を飛来する山々の下になり、地底、そして地獄に変わるのである。

So hills amid the air encountered hills
Hurled to and fro with jaculation dire,
That under ground they fought in dismal shade;
Infernal noise (Book 6, lines 664-667)

（かくして彼我互に烈しい勢いで投げ合う山と山とが空中高く激突するといった有様で、その凄まじさたるや、いわば地底深く不気味な暗黒の中で戦っているようなものであった。轟々たるその音はまさに地獄のそれであった）

ここでは、有史前の、ヘシオドス風の巨人の戦いが基になっているが、現代風に解釈すれば、戦争による環境破壊が行われているわけで、お互いが同じ武器を用い、目には目を、歯には歯を式の解決方法に頼る時、それが聖戦の論理に基づくものであれ、最終的に行き着く先は、世界の、そしてお互いの破滅でしかないことをミルトンは、知っていなかっただろうか。

暴君に対する戦争の必要性をミルトンが説く時と同じように、義なる戦いの根幹には、防衛の正当性がある。[14] 天上の戦いもまた、サタンの不遜な攻撃に対する神の軍勢の天国防衛戦争の体裁をなしている。しかし、両軍が陣容を整え、対峙した時、敵の脅威に対して先制攻撃、「高貴なる一撃」('a noble stroke', Book 6, line 189）を加えるのは他ならぬ神の軍勢の一人、アブデルだということを思い出せば、ミルトンの時代の防衛概念が、現代で言えば、核抑止論に基づく、米ソ冷戦時代のそれではなく、ブッシュ・ドクトリンのそれであることを指摘する必要があるだろう。つまり、敵の脅威を感じた場合、攻撃を受ける前に先制攻撃（preemptive strikes）を良しとする考え方であって、侵略的帝国主義との境界線を極めて曖昧にする危険性を孕んでいるのである。『失楽園』の神自身が、ミカエルやガブリエルらに「あの敵の軍勢を、力をもって制圧するがよい。」('subdue / By force', Book 6, lines 40-41）と指示し、キリストにも

... bring forth all my war,
My bow and thunder, my almighty arms
Gird on, and sword upon thy puissant thigh
(Book 6, lines 712-714)

（わたしの武器の全てを用い、強力かつ全能な武器である、わたしの弓といかずちとを汝の身にまとい、わたしの剣を汝のその強い腰に佩びるがよい。）

と命じる。　天上の戦い３日目のサタンの軍勢の背走ぶりを見ると、確かに、James A. Winn が指摘するように、キリストの纏う武具は、「寓意的な」もので、「今まで使われていた物質的、機械的な武器と注意深く分けられている」といえるかもしれない。[15] ある意味では、キリストの攻撃の効果は、霊的なもので、サタンの軍勢の「力はことごとく萎え果て、かねての旺盛な血気も涸れ果て、ただもう疲労し、困憊し、勇気を失い、意気沮喪し、あげくの果ては、斃れ伏すのみ」('that withered all their strength, / And of their wonted vigour left them drained, / Exhausted, spiritless, afflicted, fallen', Book 6, lines 850-852) という状態は、キリストの武器がこれまでの両軍の武器と異質のものであることを示唆している。しかし、それでも現代の我々は、武力の絶対的な差を見せつけることが、イラク戦争でのアメリカ軍の一斉攻撃作戦 'Shock and Awe' のように、敵軍の戦意喪失を目指した心理作戦の一つであり、必ずしも霊的な、神聖な力を表すのではないことを感じてしまう。キリストの武器と他の天使たちのそれとの違いは、単に殺傷能力の程度の差にすぎないのではないか。

in his right hand
Grasping ten thousand thunders, which he sent
Before him, such as in their souls infixed
Plagues; they astonished all resistance lost,
All courage; down their idle weapons dropt
(Book 6, lines 835-839)

（右手にしっかと千の十倍ものいかずちを摑み、前方に向かって投げつけられた。それは、敵軍一人一人の魂に恐るべき一撃となって突き刺さっていった。彼らはただもう呆然自失というか、すべての抵抗力を失い、すべての勇気を失い、持っていた空しい武器の類をことごとく放棄してしまった。）

キリストを含めた、正義の軍勢の用いる武力が、全て聖戦の論理によって正当化されているとしても天上の戦いの結末は、正義は必ず勝つ、という公式を、少なくともこの時点で、満足させるものではない。もはや、スペンサーまでの叙事詩の中でのように、英雄が悪しき竜を征伐し、決定的な勝利をもって終わる物語は語られず、むしろ１７世紀英国のパンフレット戦争や党派的口論のように、明白な敗者と勝者との決定はいつまでも遅延さ

れる。William McQueen は、「天の聖域において祀られ、安らかに坐しておられた全能の父なる神」('the almighty Father.... / Shrined in his sanctuary of heaven secure', Book 6, lines 671-672) が、キリストに栄光を帰するために、キリストの参戦までは、「すべてを黙認し」('permitted all', ibid., line 674)、天使たちの戦いの外にいたことを正しく指摘している。確かにキリストの登場は、「凡そ戦いの手段として考えうるあらゆる手段を尽くして戦った」('War wearied hath performed what war can do', Book 6, line 695) 後のこととして語られている。[16] しかし、意味深長なことに、その直前の神の言葉—「私は彼らの断罪を遅らせている。それゆえに彼らは果てしなく永久に戦い続け、最後まで決着はつかないであろう。」('I suspend their doom; / Whence in perpetual fight they needs must last / Endless, and no solution will be found', ibid., lines 692-694) —は、キリスト参戦を条件として変化する表現としては書かれていない。天上の戦いでの、一見、キリストの勝利に見えるものは、実は、天からの排除にすぎず、サタンの軍勢自身が選んだ落下によって悪は存在し続けるのである。

headlong themselves they threw
Down from the verge of heaven, eternal wrath
Burnt after them to the bottomless pit.
(Book 6, lines 864-866)

(彼らは、真っ逆さまに、天の端の一角から身を躍らせて下方へと飛び降りた。永遠の怒りが底知れぬ奈落に至るまで焔をあげてそのあとを追っていった。)

勿論、ミルトンは聖書の記述に従って、アダムとエバを誘惑させるためにサタンを生延びさせる必要があったのであるが、サタンの軍勢が(神学的には自由意志によって)この天国からの排除に加担することで、その分、キリストは、父なる神の摂理に従って、自身が決定的な勝利をもたらす、唯一の英雄であることを程度としては減ぜられることになる。さらに、ラファエルが、アダムに「お前のために善かれと」('for thy good', Book 5, line 570) 語った「戦う天使たちの目に見えない武勲の数々」('the invisible exploits / Of warring spirits', Book 5, lines 565-566) は、あくまで「霊的なものを物的な形相に擬えて」話されたものであって、厳密な意味での事実の描写ではない。目的は、教訓なのだ。そう考えると、ミルトンの「地上の事柄を物差しにして」語られた天上の戦いが示唆することの一つは、天上の戦いでの武力に対する武力の戦いの結末が、排除し、分離すべき他者/敵を創出し、サタンの軍勢を目に見えないゲリラ、もしくはテロリストへとその戦いの様式を変質させる結果となっているのではないかということである。[17] アダムとその子孫に対する彼らの攻撃は、目に見えないテロリストのそれであって、天上の戦い以降の状態は、ま

るで現代の、アメリカ帝国主義対イスラム原理主義が作り出す国際情勢のように思えさえする。米ソ冷戦時には有効であったかもしれない、軍備に対する軍備という、勢力の均衡に基づく抑止論や防衛概念は、もはや何処に潜伏しているかわからない敵にはあてはまらず、通用しない段階へと進んだ状態と言えるだろう。少なくともはっきりしているのは、天上の戦いは、新たな戦いの契機となり、エデンの園で、質を変えて反復され、アダムとエバの堕落後、即ち一種のテロ行為成功後、「狂乱」が、まず生命なきものから始まり、「不和」が烈しい憎悪を植えつけ、「今や獣は獣と、鳥は鳥と、魚は魚と、凄惨な争いを始めるにいた」るということである('Discord first / Daughter of Sin, among the irrational, / Death introduced through fierce antipathy: / Beast now with beast gan war, and fowl with fowl, / And fish with fish', Book 10, lines 707-711)。

確かに、清教徒の理論体系においては、人間の歴史は闘争の歴史であって、聖徒は決して悪との和睦を希望してはならず、戦い続けなければならない。[18] 重要なのは、ミルトンがこの絶えざる戦いを物理的な意味で考えていないように思われることだ。ミルトンは、トマス・フェアファックス卿へのソネットの中で、連戦練磨の武勲を褒め称えた後で、彼の平和時の貢献を期待して書いたように、「戦争が生み出すことのできるものは、果てしない戦争にすぎない」('what can war, but endless war still breed', 'On the Lord General Fairfax at the siege of Colchester', line 10) ということを知っていた。[19] これも現代風に言い換えるならば、ジョージ・W・ブッシュを批判したマイケル・ムーアの『華氏９１１』の最後の場面で引用されるジョージ・オーウェル (George Orwell) の『１９８４年』の一節が指摘していることと同じだと言える。 即ち、「戦争が、現実のものである時、勝利は、可能ではない。戦争は、勝利されることが意図されているのではなく、継続的であることが意図されているのだ。」('... it does not matter if the war is not real. For when it is, victory is not possible. The war is not meant to be won, but it is meant to be continuous.')[20]

キリスト教の神の計画の観点から言えば、天上の戦いが終わった後、ハルマゲドンの最終戦争終了までの間、平和という概念は常に繰り返される戦争の、休止状態、つまり、相対する概念でしかなくなる。１７世紀中葉の英国において、平和が成り立つのは、たとえば、アンドリュー・マーヴェルに言わせれば、「パラダイスの唯一の地図」('Paradise's only map', 'Upon Appleton House', line 768) であるアップルトン館の囲われた庭の中だけで、イギリスという庭はもはや戦で荒れ果てていることが嘆かれている ('But war all this doth overgrow: / We ordinance plant and powder sow', lines 343-344) し、ヘンリー・ヴォーンにとっては、平和が存在するのは「星の彼方の遠い国」('a country / Far beyond the stars', 'Peace', lines 1-2) で、しかもそこでも天使たちは戦争に備えている ('Where stands a winged sentry / All skilful in the wars', lines 3-4) 状態なのだ。[21] 当然、アダムとエバの堕落後の世界に生きるミルトンにとって、天上での出来事を描きながらも、もう

既に地上での出来事が重なってしまうのは必然的であるわけで、彼の描く天上の戦いでは、地上の、現実の戦いが既に始まっているということができるだろう。だからこそ、そこでは本来そうあるべき、Alastair Fowler の注釈が言うような「疑いなき正義の戦い」('an unquestionably just war', p. 317) とは違った、現実の戦いがその特徴として持つ、戦いの継続性、決定的な勝利のなさ、が表象された戦いであらざるをえないのだ。

もしも天上の戦いが純然たる天上の戦い、即ち、人間的な不完全さが一切介入しない世界の出来事として起こり、また描かれるのであれば、アブデルの述べた「正義は必ず勝つ」という法則を常に成り立たせて描くことも可能であっただろうし、神やキリストの、悪に対する義憤や悪を排除する行為の中に何ら咎めるべきものは見出されないであろう。手放しで「正しき復讐の怒りを発して、冒涜の徒を、御前と正しき者の住処より去らしめ給うた神に栄光あれ」('Glory to him whose just avenging ire / Had driven out the ungodly from his sight / And the habitations of the just', Book 7, lines 184-186) のはずなのだ。しかし、たとえば、聖霊の導きを受けたと称し、神やキリストの真似をしながら怒り、戦う、不完全な人間（たち）の姿が重ねられる時、当然ながらその義憤や聖戦の正当性は懐疑的なまなざしを受けざるをえないだろう。この世の聖戦は、悪の問題に関して約束されたあの世での最終的な解決をこの世での暴力による最終的な解決へと擦り替えてしまうからだ。[22] かくして、ミルトンの天上の戦いの描写は、良き天使たちの天上での聖戦に疑念を投げ掛けると同時に、重ねられた、ミルトンの生きた時代の地上の戦いでの聖戦論理へも疑念を投げ掛けているように思える。そして、悪しき天使たちの戦いが清教徒たちの戦いと重ねられるように思われる時にそれが立ち現れるのは偶然ではない。実際、清教徒革命は勿論のこと、英国の共和政体主義者のイデオロギーも政治的な自由というものを、軍事力を背景にするものと考えていた。似て非なるものとはいえ、「我々の力は我々自身のものだ」('Our puissance is our own', Book 5, line 864) と、サタンがアブデルに告げ、自由の名の下に、神の法を拒み、自分たち自身で作り上げた政治的な権威を打ち立てようとする時、彼らは、「一切をただ武力の点から評価」('by strength / They measure all', Book 6, lines 820-821) する。確かにサタンたちは、共和政体主義者のイデオロギーを悪用しているように思えるが、革命戦争、そしてプライドの粛清 (Pride's Purge) という軍事的クーデターでその体制を始め、マーヴェルの言葉を借りれば、「常に剣を立てて構えておく」('still keep thy sword erect', 'An Horatian Ode upon Cromwell's Return from Ireland', line 16) ことによって維持された、新たな共和国の政治体制は、程度問題ではあるとしても、反逆天使たちと同じ、軍事的な力の論理によっていたことも否定できない。[23] さらに、王政復古後に相次いで出版された急進的反体制派の驚異譚パンフレット *Mirabilis Annus* (1661) や *Mirabilis Annus Secundus* (1662) 等の中で何度も繰り返して語られたものに、英国各地の空で戦争の太鼓と銃声が響き渡ったり、天使が戦う幻が見られた、という報告があるが、これが、チャールズ２世の現体制を神が嘉されていないこと、近々、

新たな内戦が勃発することの予兆として解釈されていたことは、『失楽園』においてこの驚異譚で報告されている現象を再現しているのが、他ならぬ、天上の戦いで破れ、地獄に落ちたサタンたちの軍勢であることを考えると興味深い。[24] つまり、ミルトンの驚異譚では、サタンが天の王である神の体制を良しとせず、新たな報復の戦いを予期しているのだ。

As when to warn proud cities war appears
Waged in the troubled sky, and armies rush
To battle in the clouds, before each van
Prick forth the airy knights, and couch their spears
Till thickest legions close; with feats of arms
From either end of heaven the welkin burns.
(Book 2, lines 533-538)

(驕る都に警告を発するために、気配ただならぬ大空に戦雲が立ち込め、忽ち対峙していた両軍が黒雲の只中で激突する姿が見られるというが、それと同じように、これらの空中を翔る騎士たちは、それぞれの前衛の前面に出て槍を構えて突進し、あわや密集した本隊が激突するかと思われる瞬間、停止するのであった。このような勇壮な戦闘競技のため、天の両端から発した火で空は炎々と燃えたった。)

清教徒軍と同様に、力の論理に基づいた反逆天使たちは、天上の戦いの第一日目の失敗が、単に軍事力不足にあるとして、「さらに堅固な武装とさらに強力な兵器」('more valid armes, / Weapons more violent', Book 6, lines 438-439) さえあれば形勢は逆転すると信じて、当時の大量破壊兵器である、火薬と大砲を発明する。ラファエルは、サタンの発明に対する部下たちの次のような反応を語る。

The invention all admired, and each, how he
To be the inventor missed, so easy it seemed
Once found, which yet unfound most would have thought
Impossible (Book 6, lines 498-501)

(彼らは全員サタンの創意工夫に驚嘆するとともに、なぜ自分がこのことを思いつかなかったのかと、各自訝った。まだ見つからない間は、誰の目にも不可能だと思われたものでも、いったん見つかってしまえば、誠に易々たるものだと思われたらしいのだ)

ここでミルトンは、アメリカ大陸を発見してスペインへ帰国した後にコロンブスが行った

とされる所謂「コロンブスの卵」の逸話を思い浮かべていた可能性が高い。実際は、この逸話は、ジロラモ・ベンゾーニという１５１９年ミラノ生まれのイタリア人によって発明されたものだ。彼は、１５４１年にアメリカへ行き、新世界での苦難と旅の生活を１４年間経験した後で、１５６５年ヴェニスで *Historia del Mondo Nuovo* を出版している。この本は、ラテン語、フランス語、ドイツ語、フランダース語に翻訳されており、ミルトンは、この当時人気のあった本を読んでいたかもしれないと私は考えている。この書物の報告によると、コロンブスは、スペイン貴族たちと宴会に出席しており、いつものようにインド諸島への新航路発見に話題が及んだ際、コロンブスは卵をテーブルの上に立てて見せた。最も広範に流布していたラテン語訳では、スペイン人たちの反応が次のように記されている。

> Ea res omnium animos verecundia pupugit, postquam vtique illis patuit quid sibi tacitis ambagibus vellet: Nimirum id, postquam primus ipse tentasset, iam apertum omnibus & factu facile esse: debuisse ipsos potius principes Indiæ quærendę viam rationémque inire, nec se ridere qui primus id experiri ausus esset, sicuti antè id cœptanti mirabundi illusissent, quasi rem impossibilem aggredienti.[25)]

しかしながら、ベンゾーニとミルトンの重要かつ確かな接点であり、『失楽園』の言葉使いに影響を与えた書物は、サミュエル・パーチァス（Samuel Purchas）の *Hakluytus Posthumus or Purchas His Pilgrimes, Contayning a History of the World in Sea Voyages and Lande Travells, by Englishmen and Others* (1625) である。ボズウェル (Campbell Boswell) もこの本をミルトンが確かに読んだ書物のリストの中に数えている。[26)] パーチァスへのほとんどの言及は、ミルトンの *Brief History of Moscovia* の欄外の注に記されているもので、彼の *Commonplace Book* にある、他の２箇所も「スマトラの原住民」と「ヌミディアの詩人たち」への言及であるが、パーチァスの作品は東方世界の記述と同様に西方世界の記述も含んでいる。さらに決定的なのは、第４冊の１４４８－１４５４頁でパーチァスは、「ジェローム・ベンゾウ」の新世界の記録を抄訳していることである。そして、第１冊の中にある第 2 巻の'A Description of all the Circum-Navigations of the Globe' で、コロンブスの「賞賛すべき」（'admirable'）決意、即ち「どんなに或る者たちが愚かだと嘲っても、また他の者たちが不可能だと拒んでも、彼の追及を彼はけっして断念しなかったということ」（'that howsoeuer some derided as folly, others reiected as impossible, his suit, yet he neuer desisted'）を褒め称えた数頁後で、ここでは典拠を示さないまま、コロンブスの発見が起こした、人々の「嫉妬心」（'Enuy'）を語るために、卵の挿話を述べている。

> Euen the Spaniards themselues, ... by light esteeme of his worth haue shewed a contemptible contempt of him: some of whom obiecting to himselfe the easinesse of this Discouerie, as he sate at Table, he prayed to make an Egge, which then he gaue them, to stand on end; which when they could not, hee bruising the shell, and making the end flat, made it to stand thereon: thereby insinuating, how easie it was for them to doe that which they had seene and learned of him.[27]

ミルトンの堕天使たちとスペイン貴族たちとに共通なのは、彼らの高慢さと嫉妬心であると言えるだろう。ベンゾーニが言うように、後者にとって、外国人であるコロンブスが、スペイン王国のためにかくも甚大な名誉と栄光を得たということに彼らは耐えられなかった（'could not endure that a foreigner [i.e., Columbus] ... should have aquired so much honour and so much glory ... for the Spanish kingdom' [pp. 16-17].）からである。

サタンとコロンブスの明らかな共通点として、双方とも混沌の大海原を航海していることが挙げられる。『失楽園』においては、サタンの地獄からの脱出が絶えず航海用語によって描かれ、彼の主な功績を表すために使われる比喩は、しばしば発見のための航海の旅と重ねられるのだ。まず「この狂乱の深淵に向かって、慎重な悪魔は地獄の縁につっ立ったまま、じっと行く手を凝視し、自分のこれからの船旅のことを思った。」('Into this wild abyss the wary fiend / Stood on the brink of hell and looked a while, / Pondering his voyage; for no narrow frith / He had to cross' [Book 2, lines 917-920].）予測できるように彼の航海は容易ではなかった。「幾多の困難と危険にも直面し・・・それは、互いに鬩ぎ合う岩礁の間をぬいながら、ボスポラス海峡を通過した時のアルゴ号が、乃至は、左舷ではカリブディスを避け右舷では渦巻きすれすれに進路をとったオデュッセウスが、直面したものよりさらに甚だしいものであった」('harder beset / And more endangered, than when Argo passed / Through Bosporus, betwixt the jostling rocks: / Or when Ulysses on the larboard shunned / Charybdis, and by the other whirlpool steered' [Book 2, lines 1016-1020])。しかし、求めていた新世界を視野におさめ、「辛苦も次第に軽くなり、薄明の光をうけて前よりさらに穏やかになった波の上に、彼は心安らかに浮かぶことができた。そして、策具や艤装こそ無残にちぎれたものの、荒れ狂った嵐をのりきった船のように、今や勇躍して目指す港に向かって進んだ」('Satan with less toil, and now with ease / Wafts on the calmer wave by dubious light / And like a weather-beaten vessel holds / Gladly the port, though shrouds and tackle torn' (Book 2, lines 1041-1044) のである。

サタンとコロンブスを重ねて読む読み方は、『失楽園』が植民地建設の物語でもあるという観点から見るといっそう強められる。天国を追放された後、サタンは、集った悪魔の

部下たちに、新たな領土を約束する。梗概の言葉を使えば、「彼は、天国を再び手中に収める希望がまだ残されている、といって慰める。しかし、最後に新しい世界のことについて彼らに告げる」('he comforts them with hope yet of regaining Heaven, but tells them lastly of a new World' [Book 1, The Argument]) のだ。そして、David Armitage が指摘しているように、「冒険」('adventure') という言葉とその同族語は殆ど独占的にサタンと「集団をなし、密集隊形を作って、もしかしたらどこかにもっと安住の地があるかもしれぬとばかり、この陰惨な世界を隈なく探索しようという大胆不敵な冒険を思いた」つサタンの軍勢 ('squadrons and gross bands / On bold adventure to discover wide, / That dismal world, if any clime perhaps / Might yield them easier habitation' [Book 2, lines 570-573]) の軍事計画を表している。[28] 天国の侵略は、あまりに危険が伴うために、まず最初に「神の王国に加わった新しい世界」('the addition of [God's] empire' [Book 7, line 555]) を植民地とし、そこを天国を攻めるためのさらなる軍事行動のための先陣的軍事基地とすること、ベルゼバブが言うように、「そこから、付近に備えられているはずの武器を取り、侵入の好機を逃さず、再び天国に入っていく」('whence with neighbouring arms / And opportune excursion we may chance / Re-enter heaven' [Book 2, lines 395-397]) ことが、堕天使たちの戦略であった。サタンが新世界を植民地化する成功物語は、コロンブスの領土拡大物語の最初の部分と見事に重ねられる。堕落後、アダムとエバは、腰に纏うために葉を集める。

...vain covering if to hide
Their guilt and dreaded shame; O how unlike
To that first naked glory. Such of late
Columbus found the American so girt
With feathered cincture, naked else and wild
Among the trees on isles and woody shores.

(Book 9, lines 1113-1118)

(それにしても、彼らの罪科と恐るべき羞恥を蔽い隠すのには、なんとお粗末な蔽いであったことか！　彼らの最初の裸体の放っていたあの栄光と、なんと似ても似つかぬものであったことか！　先頃コロンブスが発見したアメリカの住民も、羽根のついた帯をこんな風に腰に纏っただけの裸体姿で、島や海岸の鬱蒼たる森の中を横行していたという。)

サタンとその軍勢が「この新しい世界を征服する」('conquering this new world', Book 4, line 391) 物語という、この文脈では、ミルトンのコロンブスへの明らかな言及とあいまって、サタンの発明に対する部下たちの反応がベンゾーニの『新世界の歴史』、少なくと

もベンゾーニに由来するパーチァスの記述を思い浮かべながらなされたものである可能性がますます高まってくるように思われる。いまひとつ関連する重要な点は、このイタリア人による書物は、アメリカ大陸でのスペインに対する激しい非難と攻撃に満ちているということである。それは絶えず「原住民を行為においても言葉においても虐待し、黄金を要求し、女たちを陵辱し、悪辣な行為を行う」('ill-treated the Indians both in deeds and words; demanding gold of them, violating their women, and committing other dishonest actions', p. 25) スペイン人たちの非人道ぶりを描いているのだ。 意義深いことに、１６２５年に六頁ほどの抄訳を行ったパーチァスの 'Briefe extracts translated out of Jerom Benzos, three Bookes of the New World' は、正にスペイン人たちの極悪非道ぶり ('the Spaniards cruell handling of the Indians') を強調する目的でなされたと言えることだ。ベンゾーニの言葉をパーチァスは、「一旦、スペイン人たちが彼らの旗を翻した所ではどこでも、彼らは、はなはだしい残酷さの模範によってなだめがたい憎しみの永続的な記念碑を原住民たちに残した」('Once, in whatsoeuer places the *Spaniards* haue displaied their colours, by their examples of crueltie they haue left to the Natiues eternall monuments of implacable hatred.') と翻訳している。さらに、スペイン人たちの残酷さは、悪魔的なものとして表されている。

> Some of the *Spaniards* are so cruell, that if a slaue hath not brought his diarie or day-scot, or otherwise hath angred his imperious Master, he strips him naked to cloath him with stripes (according to the *Law of Baian*, as they call it, deuised I thinke by some cruell Diuell) his hands and feete bound, and the prostrate slaue tied to some crosse timber, with a rod or roape he is beaten till the bloud issue from all parts[.][29]

そして、その乱暴な偏向性と敵愾心ゆえに、ベンゾーニの本は、政治的に有用である可能性を持ち、実際、有効だった。アメリカ、西インド諸島でのスペインの優勢に取って代わるため、多かれ少なかれスペインに敵対して同盟する諸外国は、ベンゾーニの極端な陳述と徹底的な非難の言葉を熱心に採用したのである。[30] 勿論、イギリスは、反スペイン同盟に与しており、「彼らが、あの西側地域のいくらかの部分の最初の発見者だった」('they were the first discoverers of some parts of that western region') という理由でアメリカ貿易の独占権を維持するという決定を嫌悪していた。[31] ここで思い出されなければならないことは、ミルトンが『失楽園』を書き始めたのは、このような国際情勢の下であったということ、そして結局のところ、反キリストの砦、カトリック教国スペインをミルトンが絶えず嫌っていたことは明白であった、ということである。たとえパーチァスの抄訳がミルトンをしてベンゾーニの『新世界の歴史』を調べてみようという興味をおこさせなかっ

たとしても、反スペイン・プロパガンダとして機能する本の政治的側面をミルトンが巧妙に展開させたということは確かなように思える。

John Aubrey によると、ミルトンは、『失楽園』執筆を１６５８年に始め、１６６３年までに書き終わっていた。[32] 海上においてスペインは、長らくイギリスの宿敵であり、新世界でのスペイン領を攻撃するという、クロムウェルの「西方政策」('Western Design') は、１６５４年以来実行に移されていた。おそらく、さらに重要なことは、ミルトンがラテン語秘書官として公の仕事に携わっていた頃の、イギリスの戦いの最後のものは、１６５５年に始まり、１６５９年のピレネーの講和まで続いた、対スペイン戦争であったことだ。確かに、アメリカとスペイン領ネーデルランドの実際の商業的意義は大きかったが、理屈の上では、イギリスは、スペインに対してイデオロギー上の戦争を戦っていたのであって、「多くのフランドル地方の人々とスペインの過酷な支配下にある人々が、自分たちは新教徒であると公言し、大きな町の幾つかがスペインのくびきを払い除けることができるようにする」('many of the people of Flanders and those parts kept under [by] Spanish severity might declare themselves Protestant, and several of the great towns be induced to throw [off] the Spanish yoke'.) ための戦いであった。[33] だから、ミルトンが、彼の自国の敵に対しての敵愾心を天上の戦いを描く際に反映させても自然なことなのである。

ただ、ベンゾーニの(そしてパーチァスの)コロンブスとミルトンのコロンブスには一つ、しかも決定的な違いがある。前者の旅行記作家たちにとっては、新世界の発見者は、堅忍不抜の冒険家であり、特にベンゾーニにとっては、誇るべき英雄的な同国人であって、実際、ベンゾーニの記述は、明らかに残酷なスペイン人と人道的なコロンブスとを、そしてスペイン人の残酷な植民地主義とコロンブスのアメリカ原住民との公平な取引とを区別している。しかしながらミルトンにとっては、コロンブスは、スペインの侵略活動に道を開いた最初の草分けであった。ちょうどサタンとその邪悪な追随者たちが等しく有罪であるのと同様に、イタリア人もスペイン人と同様にカトリック教徒であることに違いはないのである。ゆえに、ミルトンは、ベンゾーニのコロンブスに関する「彼はかくして西インド諸島と新世界を聖なるカトリックの国王たちのために占領した」('He thus took possession of the Indies and the New World for the sacred Catholic kings', pp. 20-21) という言葉を読んだ時、嫌悪の情を覚えたとしても不思議はなかっただろう。そして、冒険者コロンブスに対するのと同様に、サタンの叙事詩的な戦いの英雄的な行為に、読者があまり多くの賞賛を贈ることにミルトンは、注意を促しているのだと論じることもできるように思われる。

『失楽園』第１１巻において、アダムは幻に導かれ、「霊的な眼を通して」('in spirit', line 406) 征服される前の、暴力と強奪にさらされる前の平和なアメリカを見ている。

Rich Mexico the seat of Montezume,
And Cusco in Peru, the richer seat
Of Atabalia, and yet unspoiled
Guiana, whose great city Geryon's sons
Call El Dorado (lines 407-411)

（モンテスマが統治していた裕福なメキシコやアタバリパ治下のさらに裕福な都であったペルーのクスコや、未だ掠奪にあっていないギアナ、その偉大な首都をゲリュオンの末裔であるスペイン人たちは、黄金都市と読んでいた）

しかし、強調されなければならないのは、アダムの眼前にミカエルによって繰り広げられたこの示現は、「地球の半分」('[t]he hemisphere of earth', line 379) を範囲に入れたもので、アメリカ以外の場所をも含んでいるということである。たとえば、この時点では、ヨーロッパもローマによって征服されていない(lines 405-406)。Armitage によれば、アダムの見たような、バベルの塔、専制君主ニムロデ、それに付随する独裁の邪悪さがはびこる、以前の世界は、１６５０年代までに常套的に植民地に関する書き物の中で、失われた世界として描かれたようである。[34] 実は、ミルトンは、カトリック諸国を敵対視していたと言うよりもむしろ領土拡張主義一般に対して反対していたと言ったほうが正確なのかもしれない。丁度、占領のためのヨーロッパ諸国間の争いが、アメリカとその富に向けられたものだけではなく東方のそれにも向けられていたように、ミルトンのサタンは東方の玉座の簒奪者でもあるように描かれている。彼は意気軒昂として「オルムズやインドの富を、いや、豪奢な『東洋』がその帝王らに野蛮な真珠や黄金を惜し気もなくふりまいている国々の富を、遥かに凌ぐ、豪華絢爛たる王座に」('High on a throne of a royal state, which far / Outshone the wealth of Ormus and of Ind, / Or where the gorgeous East with richest hand / Showers on her kings barbaric pearl and gold', Book 2, lines 1-4) 腰をおろしている。そしてサタンの航海の旅も「商人たちが香料を買い付けるベンガラから、或いはテルナテ、ティドールの島々から、その香料を積んだ商船隊は貿易風を正面から受けて帆走し、貿易航路上を広漠たるエチオピア海から喜望峰へと向かい、夜ともなれば南極の方角めがけて潮路に逆らって南下していく」('sailing from Bengala, or the isles of / Ternate and Tidore, whence merchants bring / Their spicy drugs: they on the trading flood / Through the wide Ethiopian to the Cape / Ply stemming nightly toward the pole', Book 2, lines 638-642) ヴァスコ・ダ・ガマが開いた航路を辿っているようにも描かれているのだ。

さらには、ミルトンの反カトリック主義よりもむしろ反帝国主義が、サタンがコロンブスよりも他の英雄的指導者に類似していることをよりうまく説明できるように思われる。

その中でも特に、クロムウェルへの類似である。１６４８年、ウエストファリア条約締結後、これまでヨーロッパにおいて最強であったスペインは、急速に力を弱め、その崩れていく帝国の領土のかけらを他の列強が奪い合う状態になった。ネーデルランド連合は西洋で最強の海軍となり、最高の商業的力をもたらした艦隊を建造し、野望を膨らませるフランスも領土拡大政策を採り始め、最終的には全てのヨーロッパ諸国を敵にまわすようになる。サタンは、伏魔殿で自らの征服について語りながら、付き従う者たちを駆り立て、「あの広い世界を、あるじとして、所有する」('possess, / As lords, a spacious world' (Book 10, lines 466-467) ことを促すが、クロムウェルもまた、野望を持つヨーロッパの君主たちからそのような「あるじ」とみなされる資格があったのだ。たとえば、１６５７年に Edward Sexby は、専制君主の特徴の一つとして、彼らが国民の関心を逸らし、軍備拡張の口実として、また、新たな課税の機会として戦争を行うことを指摘し、「スペインとの戦争は[護民官]閣下にこの目的のために役に立っており、他に何の正当性もないまま最初に始められ、依然として続けられている」('The War with *Spain* serveth his Highness to this purpose; and upon no other Justice was it begun at first, or is still continued.') と述べている。また、１６６８年に、別の共和主義者、 Slingsby Bethel は、クロムウェルのことを「この近頃の専制君主、即ち、護民官」('this late Tyrant, or Protector') と呼び、彼が「西インド諸島のスペイン領を不正に侵略したこと」('unjust Invasion of the Spanish Territories in the *West-Indies*) を利己的な野心的行為として非難している。[35]

ミルトンは、共和国クロムウェル政府のラテン語書記官として外交に携わったが、彼が『失楽園』を執筆するまでには「彼は既にクロムウェルに異を唱える共和政体主義者たちと運命を共にするようになったのではないか」と論じるアーミティジを含む多くの批評家たちがいる。ミルトンは、「１６５０年代後半の護民官体制によって執行される政策に批判的であったのではないか」と言うのである。[36] クロムウェルは、フランスとスペインという二大列強の、一世紀にわたる争いの中にイギリスを巻き込ませてしまった。そしてフランスと同盟を組むという彼の決定は、極めて物議をかもす決定であったのだ。ベアボーンズ議会が失敗に終わった後、護民官政府の統治期間中、政府の方針と終末論的思想の繋がりは、唯一、外交政策においてのみ存続していた。[37] 第五王国派 (the Fifth Monarchists) ら急進派の聖戦の呼びかけを無視、あるいはその煽動を弾圧する一方で、クロムウェルは、対スペイン戦に関しては、終末論的思想を注入し続けたのである。ジャマイカの海軍中将 Goodson に「主ご自身が、君の敵、即ち、スペインがその大きな支援者である、正にローマのバビロンと論争しておられるのだ。その点で君は、主の戦いを戦っているのだ。」('The Lord Himself hath a controversy with your Enemies, even with that Roman Babylon, of which the Spaniard is the great underpropper. In that respect you fight the Lord's battles'.) と書き送っている。[38] しかし、クロムウェル派の牧師であった John Rowe によれば、１６５６年に護民官政府があらゆる努力を払って選出した新

たな国会議員の中でさえ、「この戦争に参戦することに関して幾人かは秘密の思いや論理をもっており、あなたがこの仕事に携わって以来、神は決してあなたを認めてはいない、と言おうとする者たちもいる」('[there were] secret thoughts and reasonings of some, touching the engagement in this war; and who [were] apt to say, that God never owned you since you undertook this business') という状況だったのである。[39] おそらくミルトンにとっても、少なくとも振り返ってみた時に、反対があるにもかかわらずスペインとの戦争という大きな冒険を推し進めた際に、クロムウェルは、帝国建設という致命的な誘惑に陥ってしまったように思えたかもしれない。１６５５年、「スペイン人の掠奪行為に対するこの共和国の大義の妥当性が示された護民官閣下の声明文」('A Manifesto of the Lord Protector...Wherein is shewn the reasonableness of the cause of this republic against the depredations of the Spaniards') は、以下のように宣言する。

> ... necessity, honour, and justice, have prompted to us to undertake this late expedition. First, we have been prompted to it by necessity; it being absolutely necessary to go to war with Spaniards, since they will not allow us to be at peace with them: and then honour, and justice, seeing we cannot pretend to either of these, if we sit still and suffer such insufferable injuries to be done our countrymen, as those we have shewn to have been done them in the West Indies.[40]

不評判の戦争をさらに正当化しようと試みて、クロムウェルは、１６５６年の護民官国会の施政方針演説で、自分には「われわれの殆どの行動を弁解できる準備がある、然り、必然性という理由で、必然性という理由は制定された法律の、正当化の、あらゆる考察を超えるものであるから、それらを弁解すると共に正当化する準備がある」('ready to excuse most of our actions, —— aye and to justify them as well as to excuse them, —— upon the grounds of necessity. The grounds of necessity being above all considerations of justification, of instituted Law') と述べたのである。[41] この「必然性」への固執が、クロムウェルの反対勢力が彼の演説から持ち帰った主な記憶であったように思われる。たとえば、スペイン戦争を「義に適っており、必然的であった」とする説明に言及しながら、ある反対者は、「あらゆる反乱は、宗教と改革の見せ掛けから発生し、必然性は、罪を逃れるための彼らの聖域であって、あのリウィウスの、必然的である限り戦いは正しい、という格言を裏書するように、彼ら自身がそれを作っているのである。それは、古くは異教のローマ人の格言であり、現在では、トルコ人やオランダ人のものであって、けっしてキリスト教徒の格言ではない」('All Rebellion proceeds from pretences of Religion and Reformation. Necessity is their sanctuary for sin, which themselves make, endorsing

that maxim in Livy, Bellum justum, quibus necessarium. It was anciently the maxim of Rome pagan: and is at the present of the Turks and Dutch, never of the Christians'.) と書いている。[42] ここで想起されるべきは、Alastair Fowler の注にあるように、「公益」「国家の利益」「政策」「必然性」等の価値に訴えかけることは、ミルトンの作品中では、サムソンを裏切るデリアの口実の中で、さらに我々の関心事からして重要なことは、人類を堕落させるための口実としてサタンが行っているということである。[43]

... public reason just,
Honour and empire with revenge enlarged,
By conquering this new world, compels me now
To do what else though damned I should abhor.
So spake the fiend, and with necessity,
The tyrant's plea, excused his devilish deeds.

(Book 4, lines 389-394)

(「・・・正当な公の理由と、この新世界を征服することで復讐をとげ、かくして一層強大となる名誉と主権への思いが、本来ならたとえ呪われの身であっても、到底行うに忍びないこの一事を、あえて、わたしをして行わしめようとしているのだ」このように悪魔は言ったが、例のやむをえざるがゆえに、という暴君の好む口実を用いて、自分の悪魔的な行為を弁解した。)

ミルトンのサタンは、政治的言説において殆ど首尾一貫していない。確かに、David Loewenstein の言うように、「変幻自在のサタンと彼の反乱を排他的にかつ一貫してミルトンの時代の一つの集団や人物に結びつける必要はない」のだ。[44] しかし、この国家的理由の言葉によって、ミルトンの同時代の多くの読者には、少なくとも反クロムウェル派の読者には、ここでのサタンは、限りなくクロムウェルに似ている印象を与えたに違いない。サタンもクロムウェルも「やむをえざるがゆえに、という暴君の好む口実を用いて、自分の悪魔的な行為を弁解した」のだ。

結論を言うならば、ミルトンのコロンブスへの明示的、暗示的言及は、カトリック諸国に対するのみならず、植民地拡大主義一般に対する、彼の政治的、イデオロギー的な敵意を表していると言えるかもしれないということである。もしくは、ミルトンは、反スペイン的ベンゾーニやパーチァスと共に部分的共同戦線を組織し、クロムウェル側に味方すると同時に、新教の大義の支援者という隠れ蓑の影で、実は政治的上司に対して反戦の意をちらと表していたといえるのではないだろうか。ラファエルが、サタンの発明は地上において再発明されることになるだろうという予言—

... haply of thy race
In future days, if malice should abound,
Some one intent on mischief, or inspired
With devilish machination might devise
Like instrument to plague the sons of men
For sin, on war and mutual slaughter bent.

(Book 6, lines 501-506)

（もし将来悪意がこの世に瀰漫するようなことがあれば、お前の子孫の誰かが、兇悪な意図にかられ、或いは悪魔の陰謀に誑かされて同じような器具を考え出して、戦争と骨肉相食む殺戮に狂奔し、罪に塗れた同胞を苦しめることになるかもしれない。）

一をした時、同時代の英国の読者は二人称代名詞「お前の」を、誰に話しかけられている言葉かを思い出し、それがアダムであるということを理解する前に、わずかな時間であっても、自分たち自身のことと受け取ったに違いない。まず認識されるのは、自分たちの子孫、それからアダムの子孫、つまり自分たち。結局、示唆されるのは、人類の歴史すべてにわたって繰り返される戦争の可能性。そして同時代の個人的な戦争の経験が手伝って、多くのミルトンの読者は、A.W. Verity が注を施しているように、清教徒革命の内乱の「骨肉相食む殺戮」を思い浮かべたはずだ。[45] 天上の戦いにおいてサタンは単に火薬と大砲の発明者というだけではなく、「天使たちの間に起った・・・戦い」('war ... / Among the angelic powers', lines 897-898) 即ち、内乱の発明者でもあるのだ。ミルトンは、彼の備忘録に次のように記していた。「その力の境界線を拡張し、他の国をその支配下に入れることは、あらゆる国家の義務ではない。それどころかマキアヴェリは賢明にも、もしもその国家が正しく整えられていないのならば、そうすることは危険であることを示している。」('It is not the duty of every state to enlarge the boundaries of its power and to bring other nations under its rule. On the contrary, Machiavelli wisely shows that it is dangerous to do so unless that state is rightly ordered'.)[46] この記入、併せて、ミルトンがサタンの兵器の発明を「陰謀」('machination') と呼び、コロンブスの卵への巧妙なほのめかしを行っていること、こういったことを考えると、ミルトンは、彼の時代の英国の読者たちに警告を発していたのかもしれないと思える。つまり、サタンの邪悪な毒蛇の卵は、内乱時に偽りのマキアヴェリ的指導者によって孵され、毒蛇はいまや母国の内臓を食い破って、結果的に国を滅ぼそうとしている。スペイン戦争のために国は必ずしも一致しておらず、正しく整えられてもいない。もしもさらなる拡張主義、帝国主義政策を、聖戦なり、戦争の必然性を口実に推し進めるならば、国は危うい、と。ラファエルの言葉は、既に火薬と大

砲の発明があった後の回想ではなく、その予言として語られている。この皮肉は、我々、堕落後の世界に生きている読者が、次のような事実を悟り、そしてそれ故にその事実が強調されてしまうことだ。　ラファエルの祈り、「過去の出来事を知ることによって今後の戒めとなるように」('that thou mayst beware / By what is past', Book 6, lines 894-895) が実りなきものとなり、戦争という同じ、悪魔的な間違いを人類が果てしなく繰り返してきたという事実を、である。

## 注

1) John R. Hale, 'Incitements to Violence? English Divines on the Theme of War, 1578-1632', in *Renaissance War Studies* (London: Hambledon, 1983), pp. 487-518 参照。

2) アウグスティヌス、『神の国』、服部英次郎訳、全５冊（１９８２；第３刷、東京：岩波文庫、１９９１）、第１冊、６９－７０頁。

3) *The Writings and Speeches of Oliver Cromwell: With an Introduction, Notes and an Account of his Life*, ed. Wilbur Cortez Abbot, 4 vols. (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1937-47), iii. 64: 'We know who they are that shall war with the lamb, against his enemies; they shall be a people called, and chosen and faithful'.

4) John Milton, *Paradise Lost*, ed. Alastair Fowler (1968; Tenth impression, New York: Longman, 1986), pp. 292-293, 354: 'what surmounts the reach / Of human sense, I shall delineate so, / By likening spiritual to corporal forms, / As may express them best' (Book 5, lines 571-574); 'Thus measuring things in heaven by things on earth' (Book 6, line 893).　以下、ミルトンの『失楽園』への言及は、すべてこの版に依り、邦訳は、平井正穂訳（１９８１；第５刷、東京：岩波書店、１９８３）を参考にした。天使たちの戦いにおいて最もこの世離れしているのは、地上の戦闘であれば必ず問題になる食料の調達や飢え渇きの問題がないということが一つ。もう一つは、彼らが死なないということである。サタンとサタンの軍勢は、彼らの罪故に、傷と痛みを被るが、血の代わりに「ネクタルのような体液」を流し、その傷口はまもなく塞がると描かれている（第６巻３２７－３３４行目参照）。ただ後者に関しては、Diane Purkiss, *Literature, Gender and Politics during the English Civil War* (Cambridge: CUP, 2005), pp. 47-48 が指摘しているように、地上の戦いでも、個人個人の戦士たちは殺されればそれで終わりだが、軍隊全体としては、各部分が損傷しても全体としての再結集や回復は繰り返し可能であり、殺せど殺せど再結集し、攻撃を続けてくる戦争一般における敵というものの性質、その恐ろしさを表しているとも考えられる。

5) たとえば、John Milton, *Defensio Secunda*, *The Complete Prose Works of John*

*Milton*, 8 vols. ed. Don M. Wolfe et al. (New Haven: Yale UP, 1953-82), vol. 4, p. 659 を見よ。ミルトンは、ここで新教の聖徒たちがこの世の王よりも神に従うべきことを論じた戦闘的抵抗の書 *Vindiciae contra Tyrannos* (1579) を肯定的に引用している。

6）たとえば、James A. Freeman, *Milton and the Martial Muse: "Paradise Lost" and European Traditions of War* (Princeton: Princeton UP, 1980); B.A. Wright, *Milton's "Paradise Lost"* (London: Methuen & Co., 1962), pp. 128-37; Stella Purce Revard, *The War in Heaven: Paradise Lost and the Tradition of Satan's Rebellion* (Ithaca, N.Y.: Cornell UP, 1980); Michael Wilding, *Dragons Teeth: Literature in the English Revolution* (Oxford: Clarendon Press, 1987), chaps.7-9, esp. pp. 249-57; Blair Worden, 'Milton's Republicanism and the Tyranny of Heaven' in *Machiavelli and Republicanism*, ed. Gisela Bock, Quentin Skinner, and Maurizio Viroli (Cambridge: CUP, 1990), p. 244; M. L. Donnelly, '"Ostentation Vain of Fleshly Arm": Milton's Reevaluation of the Heroic Celebration of Military Virtue' in *The English Civil Wars in the Literary Imagination*, ed. Claude J. Summers and Ted-Larry Pebworth (Columbia: Univ. of Missouri Press, 1999), pp. 202-19 を参照せよ。ドネリは、叙事詩の伝統である、武器を持った英雄に対するミルトンの若き日の熱狂振りが、１６４４年から１６４８年の間に現実の革命戦争の経験によって再評価され、護民官体制での実際的政治の中での経験を経て、理想化された戦いの概念を否定するようになったと論じている。また、パーキスは、ミルトンの天上の戦いの描写の分析にジェンダー論の観点を加えて、次のように論じている。'Milton's intelligent recognition [is] that the masculinity of militarism is too complex, too contradictory, too prone to excess to form a useful metaphor for Christian heroism, or to assuage the potent terrors that such militarism itself arouses' (Diane Purkiss, *Literature, Gender and Politics during the English Civil War*, p. 50).

7）たとえば、Robert Fallon, *Captain or Colonel: The Soldier in Milton's Life and Art* (Columbia: Univ. of Missouri Press, 1984), p. 14; Michael Lieb, *Milton and the Culture of Violence* (Ithaca, N.Y.: Cornell UP, 1994); Lieb, '"A Thousand Fore Skins": Circumcision, Violence, and Selfhood in Milton' in *Milton Studies* 38, *John Milton: The Writer in His Works*, ed. Albert C. Labriola and Michael Lieb (Pittsburgh: Univ. of Pittsburgh Press, 2000), pp. 198-219; David Loewenstein, *Milton and the Drama of History: Historical Vision, Iconoclasm, and the Literary Imagination* (Cambridge: CUP, 1990); Loewenstein, *Representing Revolution in Milton and His Contemporaries: Religion, Politics, and Polemics in Radical Puritanism* (Cambridge: CUP, 2001); John Coffey, 'Pacifist, Quietist, or Patient Militant?: John Milton and the Restoration', *Milton Studies* 42 (2003), pp. 149-74 を参照せよ。

8）Jerome McGann, *Social Values and Poetic Acts: The Historical Judgement of Literary Work* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1988), p. 126.

9）反戦論は、清教徒革命の敗者の側である王党派の文献に多く見出されるが、１６４９年のクロムウェルのアイルランドへの軍事行動に際して、軍内外の「水平派」('the Levelers') からも噴出している。Michael Wilding, 'Marvell's "An Horatian Ode upon Cromwell's Return from Ireland", the Levellers, and the Junta', *The Modern Language Review*, 82 (1987), pp. 1-14, esp. pp. 4, 14 を見よ。

10) Stella Revard, 'Milton's Critique of Heroic Warfare in *Paradise Lost* V and VI' *Studies in English Literature*, 7 (1967) は、天上の戦いの最初の段階が、叙事詩的英雄の戦いの段階であって、このことが、「不協和の『人間的』価値によって天国の雰囲気が奇妙に変えられている」('the atmosphere of Heaven is being strangely altered by the discordant "human" values', p. 131) 原因であると指摘している。

11) John Milton, *The Tenure of Kings and Magistrates*, in *The Complete Prose Works of John Milton*, vol. 3, pp. 189-99: '[Men] saw it needful to ordaine som authoritie, that might restraine by force and punishment what was violated against peace and common right'. 「剣による平和」や 'Bellum de Pace [War for Peace]' という考え方は、たとえば、George Wither, *A Collection of Emblemes* (London, 1635), p. 90: '*Peace* ... most firme abides / In those *Re-Publikes*, where, *Armes* cherisht bee; / And, where, true *Martiall-discipline*, resides'. にも見られる。ミルトンは、教育論 *Of Education* の中で教育の目的は、「人を平和時においても、戦時においても、私的公的な、全ての任務を正しく、上手に、また高潔に果たす能力をつけて適したものにする」('fits a man to perform justly, skilfully, and magnanimously all the offices, both private and publike, of peace and war', *The Complete Prose Works of John Milton*, vol. 2, pp. 378-379) ことであるとし、そのカリキュラムは、'military motions' (ibid., p. 411) を含んでいた。天上の戦いでの神の目的の一つは、「天の軍勢が・・・喇叭の響きに応じて、味方の旗幟のもとへ馳せ参ずる」('armies at the call / Of trumpet ... / Troop to their standard', Book 7, lines 295-297) 従順さと忠誠の度を見ることにあったと思われる。軍事訓練（そして日本の小中学校で未だに見られる軍隊教育的な側面）が育成する規律意識や規範意識は、一方で全体主義を助長する反面、多元主義や相対主義が生み出す許容社会、その結果としてのモラルの低下、に歯止めをかけることができる。ミルトンの時代では、信教の自由という考え方を含む、価値観が多様化したクロムウェル護民官体制下において、特に対外戦争が国民に全体主義的絶対主義の必要性を意識させる、もしくは実践させる機会を提供していたと考えられる。当時の 'toleration' に対する危機意識に関しては、Blair Worden, 'Toleration and the Cromwellian Protectorate', *Studies in Church History*, 21 (1984), *Persecution and Toleration*, ed. W. J. Sheils, pp.

199-233 を見よ。現代においては、アメリカをはじめとする西側諸国のポスト・モダン的相対主義に対抗するイスラム原理主義の「聖戦」を考えれば、戦争の精神的有用性（と考えられるもの）が理解できるだろう。

12) James A. Freeman, *Milton and the Martial Muse*, p. 63 を参照せよ。

13) John Milton, *Eikonoklastes, The Complete Prose Works of John Milton*, vol. 3, pp. 583 f. ミルトンは 'I shall ... defend, that either Truth and Justice are all one, for Truth is but Justice in our knowledge, and Justice is but Truth in our practice' (p. 583) と言う。

14) James A. Winn, 'Milton on Heroic Warfare', *Yale Review* 66 (1976), p. 78 を見よ。

15) Ibid., p. 83. 同様に、凱旋の戦車に乗ってのキリストの帰還も Stella Purce Revard, *The War in Heaven*, pp. 262-263 が言うように、単なる叙事詩的な勝利ではなく、最終的な神のもとへの帰還という寓意的、霊的な意味を読むべきなのであろう。しかし、その読みが、ドネリがレヴァードに同意して述べているように ('"Ostentation Vain of Fleshly Arm": Milton's Reevaluation of the Heroic Celebration of Military Virtue', p. 203, note 2)、確かに 'Satanic limitation of vision' の結果であっても、表現上、地上的、物理的戦いであることは否めないことがまた重要なのだと私は考えている。

16) William McQueen, '*Paradise Lost* V, VI: The War in Heaven', *Studies in Philology*, 71 (1974), pp. 96-97.

17) Michael Bryson, *The Tyranny of Heaven: Milton's Rejection of God as King* (Newark: Univ. of Delaware Press, 2004), pp. 12, 17-18 は、ミルトンは、神自体ではなく、人間の想像力から引き出された神の「像」を描いているのであって、軍事的、専制君主的に神が描かれ、人間的な国王として権力や栄光へのあまりにも人間的な願望が描かれる場合、その神は、悪魔ではないにしても、悪魔的に扱われており、そういう神をミルトンは、弾劾し、拒絶しているのだと論じている。

18) たとえば、革命戦争のさなか、Matthew Newcomen は、国会議員への説教で神と和睦を結び、教会内で和睦を結ぶことに努力しても、彼らの敵と和睦を結ばないように励ましている。'And then we need take no thought of ... peace with our enemies: God will either subdue them under us, or make the desire of peace with them: only let neither the desire of peace with them, nor of peace among ourselves, bribe us to tolerate any thing in the Church of God that might make him to be at war with us' (*Jerusalem's Watchmen* [1643]), quoted in Jonathan Rogers, '"We Saw a New Created Day": Restoration Revisions of Civil War Apocalypse', *The English Civil Wars in the Literary Imagination*, ed. Claude J. Summers and Ted-Larry Pebworth (Columbia: Univ. of Missouri Press, 1999), p. 190.

19) John Milton, *Complete Shorter Poems*, ed. John Carey (1968; Harlow: Longman,

1984), p. 320.

20) 『ガーデンシネマ・イクスプレス』第１１０号　『華氏９１１』、畑野裕子　編集（東京、ヘラルド・エンタープライズ株式会社、２００４年)、２１頁を参照。

21) Andrew Marvell, *The Poems of Andrew Marvell*, ed. Nigel Smith (London: Longman, 2003), p. 241. 以降マーヴェルの詩への言及はすべてこの版からである。Henry Vaughan, *The Complete Poems*, ed. Alan Rudrum (Harmondsworth: Penguin, 1983), p. 185. 戦争の必然性を表すために、戦時を周期的に廻ってくる冬の季節と考える比喩表現に関しては、James A. Freeman, *Milton and the Martial Muse*, pp. 24-25 を見よ。

22) Darrell J. Fasching, 'Stories of War and Peace: Sacred, Secular, and Holy', *War and Words: Horror and Heroism in the Literature of Warfare*, ed. Sara Munson Deats et al. (Lanham: Lexington Books, 2004), p. 25: 'The dividing line between "They are not worthy of eternal life" (as Christians once said of Jews) and "they are not worthy of life" (as the Nazis said of Jews) is a thin one indeed, serving to invite the violence of the promised otherworldly final solution to spill over into this world and transform it into a this-worldly final solution.' を参照。

23) 天の王に対して反旗を翻すサタンの軍勢とチャールズ１世の統治に反乱する清教徒とを重ねて読む読み方を、否定するのは、少なくとも読者反応理論の観点からは困難である。たとえそれが不合理な誤読であったとしても読者の印象レヴェルでの実際の働きかけを無視することはできないからである。たとえば、Freeman, *Milton and the Martial Muse*, pp. 154-155 を始めとする多くの批評家がこの読みを擁護してきた。ひょっとするとこの種の読みは、王政復古期にミルトンと『失楽園』が体制に対して敵ではないことを示唆する、隠れ蓑的働きを担っていたかもしれない。サタンの共和政体主義者のイデオロギー利用については、たとえば、David Loewenstein, *Representing Revolution in Milton and his Contemporaries*, pp. 211-212 を参照せよ。クロムウェルの護民官体制における軍の比重については、Austin Woolrych, 'The Cromwellian Protectorate: A Military Dictatorship?', *History*, 75 (1990), reprinted in *Cromwell and the Interregnum: The Essential Readings*, ed. David L. Smith (London: Blackwell, 2003), pp. 63-89 を見よ。

24) William E. Burns, *An Age of Wonders: Prodigies, Politics and Providence in England 1657-1727* (Manchester: Manchester UP, 2002), pp. 29, 32-33, 52, note 82 を見よ。

25) *Novae novi orbis historiae ...* (Geneuae: Apud Eustathium Vignon, 1578), p. 23. 原文イタリア語版では、*La Historia del mondo nvovo ...* (Venetia: Ad instantia di Pietro, & Francesco Tini, fratelli, 1572), p. 12. *History of the New World: Shewing his*

*Travels in America, from A.D. 1541 to 1556 with Some Particulars of the Island of Canary*, trans. W. H. Smyth, originally published by the Hakluyt Society (New York: Lenox Hill Pub. & Dis. Co., 1970) では、'... all remained confused, understanding what he would have said: that after the deed is done, everybody knows how to do it; that they ought first to have sought for the Indies, and not laugh at him who had sought for it first, while they for some time had been laughing, and wondered at it as an impossibility' (p. 17). と訳されている。勿論、ミルトンは、この書物を読んでいれば、イタリア語もしくはラテン語版を読んだ可能性が高いが、以下、ベンゾーニの『新世界の歴史』からの英語の引用はこの１８５７年初版の英語全訳版からであり、本文中に頁数を記す。

26) Jackson Campbell Boswell, *Milton's Library: A Catalogue of the Remains of John Milton's Library and an Annotated Reconstruction of Milton's Library and Ancillary Readings* (New York: Garland Publishing, Inc., 1975), p. 205. John Milton, *Complete Prose Works of John Milton*, vol. 1, pp. 368, 382-383. さらに、以下の Ruth Mohl の指摘、'*Paradise Lost*, IV, 282, which says that Paradise is far from Mount Amara, "by Nilus head," suggests Milton's readings in Purchas, as do many of his names of remote places' (p. 368) 及び、Leslie C. Tihany, 'Milton's "Brief History of Moscovia"', *Philological Quarterly*, 13 (1934), p. 306 の指摘、'In *Paradise Lost*, X, 291-293, Milton follows the example of early explorers by calling icebergs "Mountains of ice, that stop the imagined way / Beyond Petsora eastward", [based on the passage of ] '*Purchas His Pilgrimes*, iii, 527'. を参照せよ。*The Works of John Milton*, ed. Frank Allen Patterson et al. vol. 10 (New York: Columbia UP, 1932), p. 382 をも参照。

27) Samuel Purchas, *Hakluytus Posthumus or Purchas his pilgrims*, 4 vols. (London: William Stansby, 1625), vol. 1, pp. 9, 12.

28) David Armitage, 'John Milton: Poet against Empire' in *Milton and Republicanism*, ed. David Armitage, Armand Himy and Quentin Skinner (1995; Cambridge: CUP, 1998), p. 216.

29) Samuel Purchas, *Hakluytus Posthumus or Purchas his pilgrims*, vol. 4, Chap. 12, 'Briefe extracts translated out of Jerom Benzos, three Bookes of the New World, touching the Spaniards cruell handling of the Indians, and the effects thereof' (pp. 1448-1454), p. 1448.

30) 以下の箇所を見よ。*Dizionario biografico degli Italiani*, direttore, Alberto M. Ghisalberti (Roma: Istituto della Enciclopedia italiana, 1960-[1988]), vol. 8, p. 733: 'Tuttavia il libro godette di molta diffusione, come attestano le trentadue edizioni fuori d'Italia dal secolo XVI al XVIII: una fortuna che si spiega soprattutto con il

vasto interesse dei paesi protestanti per le opere che denunziavano l'inumanità dela colonizzazione ≪catolica≫; *Catholic Encyclopedia*, s.v. Girolamo Benzoni: '[F]oreign nations, all more or less leagued against Spain for the sake of supplanting its mastery of the Indies, eagerly adopted his extreme statements and sweeping accusations.' http://www.newadvent.org/cathen/02484c.htm 04/11/30

31) *The Writings and Speeches of Oliver Cromwell*, ed. Wilbur Cortez Abbott, 4 vols. (New York: Russell & Russell, 1970), vol. 3, p. 879.

32) John Aubrey, *Brief Lives*, ed. Richard Barber (Woodbridge: First Person Singular, 2004), p. 204: 'He began about two years before the king came in, and finished about three years after the king's restoration.'

33) Charles H. Firth, *The Last Years of the Protectorate, 1656-1658*, 2 vols. (New York: Russell & Russell, 1964), vol. 2, p. 219.

34) David Armitage, 'John Milton: Poet against Empire', p. 222.

35) Edward Sexby, *Killing Noe Murder* (1657; rpt. London, 1689), p. 7. このパンフレットは、暴君、王位簒奪者としてのクロムウェルを攻撃する最もよく知られた書物である。Slingsby Bethel, *The World's Mistake in Oliver Cromwell* (London, 1668), pp. 2, 8. クロムウェルが、専制君主、「偽の」君主、「国王の猿真似」であるという非難に関しては、David Norbrook, *Writing the English Republic: Poetry, Rhetoric and Politics, 1627-1660* (Cambridge: CUP, 1999), pp. 319-25 を参照。Warren Chernaik, 'Was Marvell a Republican?', *The Seventeenth Century*, vol. 20, no. 1 (2005) は、 Andrew Marvell の 'First Anniversary of the Government under His Highness the Lord Protector' と Marchamont Nedham の *A True State of the Case of the Commonwealth* (1654)、 そして Milton の *Second Defence* が「現在の変化に関して冷静な人間の頭の中に思い浮かぶ様々な疑念」（９０頁）を払拭しようとしながら護民官制度を支援しようとしていることを解説している。王制復古後は、クロムウェルを悪魔と結び付ける表象はより頻繁になる。たとえば、次のような風刺作品を見よ。 *The English Devil: or, Cromwel and his Monstrous Witch discover'd at White-Hall* (1660); *The Devils Cabinet Councell Discovered* (1660). 後者の口絵には、悪魔が共和国の紋章の下でクロムウェルの閣議の司会をしている絵が描かれている。

36) David Armitage, 'John Milton: Poet against Empire', p. 215. 護民官が、失望した独立派清教徒、共和政体主義者、セクト集団から批判を浴びるに至って、クロムウェル体制はより反キリスト勢力として表されるようになった。たとえば、David Loewenstein, *Representing Revolution in Milton and His Contemporaries: Religion, Politics, and Polemics in Radical Puritanism* (Cambridge: CUP, 2001), p. 147 は、次のように指摘している。'Fifth Monarchist propaganda aimed to stir up deep-seated popular fears

of new popery: Cromwell's supreme power was as popish as the former king's — "This popery and the old monarchie are one and the same," preached a vehement [Christopher] Feake at Allhallows', and to Feake Cromwell was 'The Father of Lyes'. また、Sharon Achinstein, *Milton and the Revolutionary Reader* (Princeton: Princeton UP, 1994), p 204, は、後期のミルトンが王位空白時代の指導者を「悪魔的」と思っていることを示唆している。しかしながら、Loewenstein は、'despite [Milton's] godly republican ideals and his likely disappointment with the Protectorate, there is not a shred of evidence that Milton came to envision Cromwell himself as a "false dissembler" [i.e., Satan]' (p. 209) と述べている。

37) １６４５年９月の国会での最初の演説の際、クロムウェルは、キリストの王国は、霊的なものであって「我々の心の中に」('in our hearts') 打ち立てられるものであると述べた (*The Writings and Speeches of Oliver Cromwell*, vol. 3, p. 437)。一方で、準公式出版物と言える *A True State of the Case of the Commonwealth* (1654) は、'that worn tenet, long since exploded, but now revived ... That temporal power and authority is and ought to be founded in grace' を信じる第五王国派を 'poor deluded souls' と見なしていた (pp. 26-27)。 Derek Hirst, '"That Sober Liberty": Marvell's Cromwell in 1654', *The Golden and the Brazen World: Papers in Literature and History 1650-1800*, ed. John M. Wallace (Berkeley: Univ. of California Press, 1985), p. 41 を参照。

38) Cromwell to Goodson, [30] Oct. 1655, in *The Writings and Speeches of Oliver Cromwell*, vol. 3, p. 860.

39) John Rowe, *Man's Duty Magnifying God's Work* (London, 1656), p. 20.

40) 'A Manifesto of the Lord Protector to the Commonwealth of England, Scotland, Ireland, etc. published by consent and advice of his Council. Wherein is shewn the reasonableness of the cause of this republic against the depredations of the Spaniards', dated 26 October, 1655, in *The Writings and Speeches of Oliver Cromwell*, vol. 3, p. 890. Abbott によると、この声明文は、「ミルトンによって書かれ、少なくともラテン語に翻訳された」(vol. 3, p. 877)。

41) Cromwell's speech to the second Protectoral Parliament, 17 Sept. 1656, in *The Writings and Speeches of Oliver Cromwell*, vol. 4, p. 261.

42) The MS note in the Folger copy of *A Book of the Continuation of Foreign Passages* (London, 1657), p. 60, as quoted in David Armitage, 'The Cromwelliam Protectorate and the Languages of Empire', *The Historical Journal*, 35, 3 (1992), p. 551.

43) *Paradise Lost*, ed. Alastair Fowler, p. 218, footnote.

44) David Loewenstein, *Representing Revolution in Milton and His Contemporaries*, p.

203: 'I see no need to align the mercurial Satan and the politics of his revolt exclusively or consistently with one political figure or group of Milton's age, whether that be with a duplicitous and impertinent Charles I, divisive Laudian prelates, Cromwell and his supposed political hypocrisy, ambitious Army leaders of the Revolution, a prevaricating Presbyterian clergy, or the Irish Catholic rebels of the 1640s'.

45) *Milton: Paradise Lost*, ed. A. W. Verity, 2 vols. (Cambridge: CUP, 1929), p. 520: 'Probably M. is thinking of the Civil War. Descriptions of civil strife and its incidents must have appealed with the force of personal experience to many of his readers.'

46) *Complete Prose Works of John Milton,* vol. 1, p. 499.